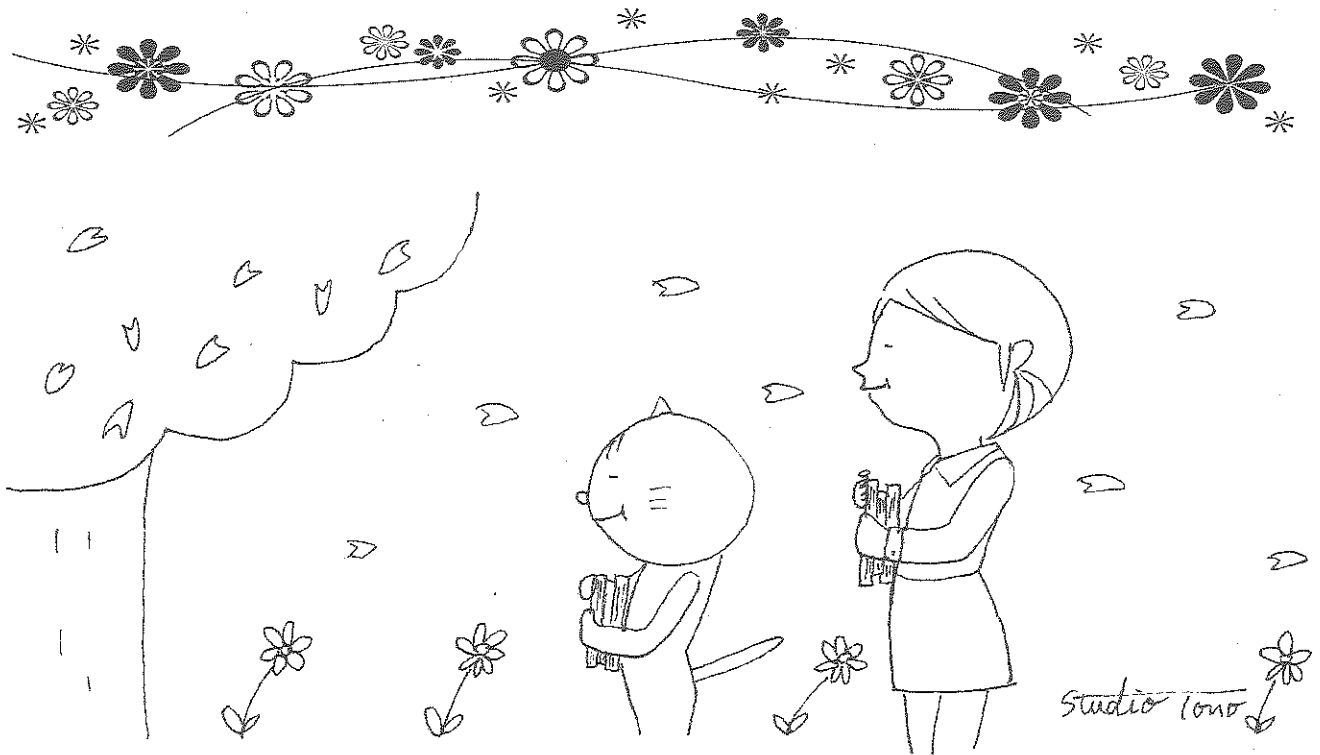


ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

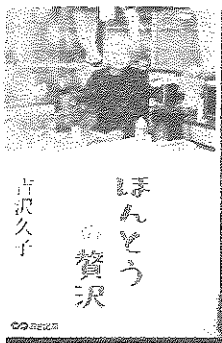
この本よんだ？

～りいふる BOOK プラス～



ほんとうの贅沢

吉沢久子 著 あさ出版 2015年 (K:文学・エッセイ)



著者は平成31年3月に101歳で亡くなりました。

家事評論家として生活者の目線で女の暮らしを考え大切にする思いを込めた書籍を多数執筆しています。その中でも本書は、老いと正面に向きあい、今を楽しく生きる生活者の知恵が、ちりばめられている一冊です。

友人とのつき合い方、自立心、人間関係を円滑にする言葉などが具体的に書かれています。「老いてこそ自分の頭で考え行動に移し、自立する」「自分にとってそれほど重要でないことは相手にあわせる」「ここまでは譲れるけど、ここは譲れないと線引きを決める」など、自分らしく生きるためのヒントが盛り込まれています。毎日を気ままに誰に気兼ねなく生きる贅沢がつづられています。(はんちゃん)

孤独の意味も、女であることの味わいも

三浦瑠麗 著 新潮社 2019年 (K:文学・エッセイ)

本書では、気鋭の国際政治学者である著者の半生が書かれています。著者がとてもつらい経験をされてきたことが分かります。しかし、起こった出来事の衝撃だけが強調された本ではありません。本書をずっと貫くテーマは、「孤独」と「女であること」です。著者がこの二つに苦しみ、ときに救われながら生きてこられた様子が読み取れます。

この二つとの関わり方は、多くの方に共感できる部分があると思います。著者の聡明な筆致により、私も過去の自分が癒されるような感覚を抱く箇所がありました。そして、未来へと続いていくように、「自分自身を、起こった出来事に定義させてはいけない。あなたはあなたが定義すべきだ」という著者の言葉が心に残ります。何度も読み返したくなるような本です。ぜひ読んでみて下さい。(A.T.)

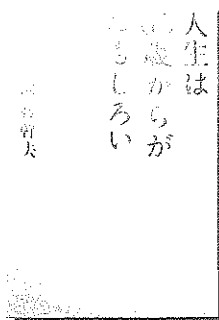


人生は65歳からが面白い

河村幹夫 著 海竜社 2013年 (E:こころ・癒し)

人生百年時代 老後の資金2000万、様々言われる中、後期高齢者の自分は、この本に飛びついた。著者は商社マンから大学教授に転職した河村幹夫氏。ビジネスの世界では海外駐在を含め、36年間会社人間として生きつつも「人生は自分のもの」との思いが強くなってきて、今で言う「夢」を追いかけ、定年を待たずして退社……

読み進んでいくと、各章にキラリと光る納得のいく言葉とシニアの知恵が満載、私達と住む世界が違うというのではなく、自分の歩いてきた自分史をふり返り、将来への道筋を考える上で必ず得るところあります。(すず子)



平成くん、さようなら

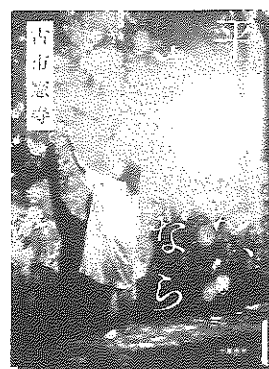
古市憲寿 著 文藝春秋 2018年 (K:文学・エッセイ)

平成生まれの人間にとって、年号が変わるとするのは初めての経験になる。年号という形で時代が終わっていくのを初めて体験したのだ。

いくつ時代が終わっても、変わらないことは多くある。例えば大人たちの「まったく、最近の若者ときたら……」という感覚もそうだろう。

この本の主人公は平成元年生まれのカップル。彼らは行く先々でインターネットを駆使し、個人の情報すべてがグーグルアカウントに紐づけられているような生活をスイスイと生きている。そんな便利で豊かな毎日の中で、常に影を落とすのが、語り手の恋人である「平成くん」の安楽死願望である。

時代の寵児である「平成くん」はなぜ死にたいのか。「平成くん」は平成の終わりとともに、20代で死んでしまうのか。それは読み手の解釈にゆだねられている。平成を生きてきた、すべての年代の人に、筆者の問いかけを感じてもらいたい。(菊山)

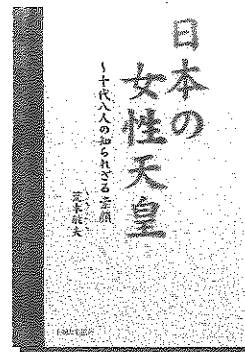


日本の女性天皇

荒木敏夫 著 主婦と生活社 2003年 (I:女性史)

高校で日本史を教えているが、我が国に過去8人(延べ10人)の女性天皇がいたことを知っている生徒は少ない。聖徳太子を摂政として政治を行った推古天皇、天武天皇の妻で「春過ぎて…」の歌でも有名な持統天皇くらいは名前が挙がるが、あとは道鏡との関係で知る人ぞ知る孝謙天皇くらいか。現在の法律の下では今上天皇の後継者が実質悠仁さまお一人という状況であり、女性天皇を可能にすべきというのが教え子の大半の意見である。

この本は歴代の女性天皇についてわかりやすく紹介してくれる。アカデミックでありながら、「平城京周辺散策マップ」とか「飛鳥周辺散策マップ」などもついていて楽しく学ぶことができる。女性天皇について考えてみたい方におススメ。(紀生)



70歳のたしなみ

坂東眞理子 著 小学館 2019年 (K:エッセイ・文学)

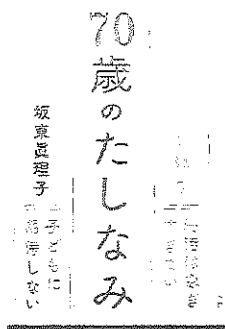
著者はベストセラーになった「女性の品格」の坂東眞理子で、人生100年時代をイキイキと健やかに生きるための32のたしなみが書かれている。

私はまだ70歳ではないが、いずれ来るその時のために70代という年代はどのような世界なのか、少し下見をするような気持ちで本を開いてみた。

昔の人生70年時代の先入観のまま晩年として生きるのは、あまりにももったいない、もっとポジティブにという著者からの生き方のヒントが「たしなみ」である。

それはどの年代にも共通する、幸せな人生を送るためのヒントでもある。

(花賀)



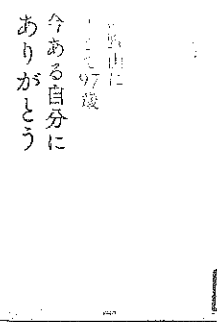
高野山に生きて97歳 今ある自分にありがとう

添田清美 著 宝島社 2017年 (J:自伝・評伝)

いまや世界遺産としても著名な高野山に生まれ、大学時代に東京へ出た以外はずっとこの地に生きてきた著者。戦後すぐ26歳で蓮華定院に嫁し、賢明に明朗に家庭と寺を守り、宿坊の経営にも携わり、「この家に嫁がなければこんな幸せな生涯を過せなかった」と明言する著者の70余年間が主に描かれている。

幼少期から今日にいたるまで、いつの時代の記憶も鮮明で、瑞々しい感性、生き生きした筆致での描写は、その時々々の臨場感に満ちていて楽しく読めた。

各章末には、数行の要約文があり、まるで格言のようで味わい深い。大学で習得した英語を駆使して、近年とみに増加一途の外国人観光客をもてなす100歳近い著者の姿がいつまでも脳裏に残った。(大空)



明日の子供たち

有川浩 著 幻冬舎 2014年 (K:エッセイ・文学)

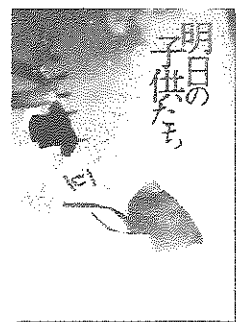
約90人の子供たちが暮らす、天城市内の児童養護施設『あしたの家』。そこに、とある「ベタな動機」で志望した新任職員の新三田村慎平がやってきた。

彼は「聞き分けのいい」子供たちに翻弄されながらも、愛想はないが涙もろい3年目の和泉和恵や理論派で熱血ベテランの猪俣吉行らと働く中で少しずつ子供たちのことを知る。

そして、元営業職の経験と感覚が、ときにファインプレーも生み出し……

「施設に入っているのは、かわいそうなことじゃない」入所者の1人である谷村奏子の想いは、社会に通じるのか。「明日の大人」である子供たちの未来は開けるのか。

重いテーマを、軽やかなタッチで描いた1冊だ。



(やっくん)

傲慢と善良

辻村深月 著 朝日新聞出版 2019年 (K:エッセイ・文学)

著者は『かがみの孤城』(りいぶる所蔵あり)で本屋大賞を受賞した若手の作家であるが、作家に専念する前には地方県庁で非正規雇用の女子職員であった。その経験もこの作品には活かされているのかもしれない。

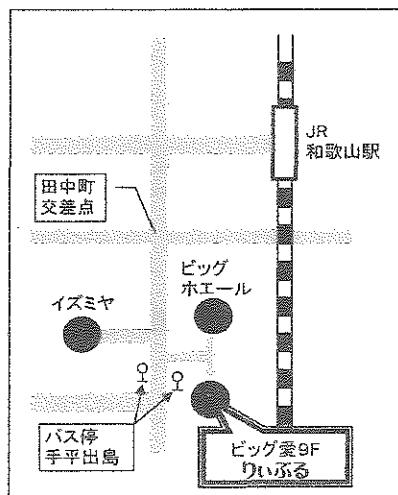
お得意のミステリータッチのストーリー展開をとりこんだ、婚活にまつわる男女の心理状況やなぜ結婚にいたらないのかというするどい指摘をした恋愛小説である。平成31年度織田作之助賞候補作品であった。



(か)

※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第20号 (2020年3月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

昨年は、ボランティア保険加入問題でいろいろ議論しました。その中から、老若男女・いろんな立場の人が本を通じて話し合い、「ゆるく」「楽しく」「長く」続けたいという方針がでてきた気がします。

★あなたも書評を書いてみませんか? ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。E-mail libreplus@yahoo.co.jp